

とくしつり天衣天衣廿二西子大澤皇子始く詩賦
とつらり好みそれよりあつる風林月の巻詩之清吹
賈^ウ_ウの^ウを^ウ海^ウ一^ウ物^ウ花^ウの^ウ紫^ウの^ウ襟^ウ袖^ウ也^ウ垂^ウ綿^ウ浦^ウれ^ウの^ウ裁^ウす
ゆめし

天曆六年十月十八日後江相公の妻よ白糸乞ふては
るりせりおるほくあひまてそのうら成れれど自衣
とまひつり西の色わごちよそありき侍者も物
あつるもの出入あひまてつひつりおる於率夫より
ありはつるのく向もまきとれどあつたりとぞ昔あひ
つりをゆつとて幸ふてまわつはのほひつるたひつり

天曆中御綱文時よ作て文集廿二結えよひ
て多ゆづつとて物定むとれど

送蕭處士遊黔南

能文好飲老蕭郎 身似浮雲鬢似霜
生計施來詩是業 家園忘却酒為鄉
江從巴峽初成字 猿過巫陽始斷腸
不醉黔中爭得去 摩圍山月正蒼々

あのか初成字もふまびぬてまのまのまのまあり
るまづれはあかぬえれどはる新まのまあり

わりぞいそよよめ人目たれやと無の事く
 あある傳文序成相規が書をばよま子晋之昇仙後
 人立祠に候候し月半大鶴之早世の客墜法提現山
 く雲ののうとんとどれりやと後月れわく
 ことろよあ糸ちやくと虫衣の人解りうらハ天秋の感
 れわぬりわくこれぬひくゆよや
 蒼波路遠や子星白露山深る一変 いるハ橋並轉
 が秀句あくゆり成齋地と人入唐の耐も作ありと
 稀しきり但雪守星とゆと霞守星とわく平免
 を一おみとハ虫一おみとあけりしりきる成唐人そ

て儘句ゆくゆるをそくくハかきや星多つあをゆり
 よろりぬましそぞいひをゆりゆりのよ人れいんき
 ことんぞきんれきるたあのみやねつる
 前途程遠弛思於唐山之夕雲後會期途霑櫻於鴻
 肌之曉涙と後以相公が書とゆと海浦人感涙と
 りごせゆのらふ中野人よあひくねおまことあは
 のがれとやと向きりあうくごうは若きれば日本必ハ
 文とりらあゆまよわくごりきるまごくとげめきる
 ねんき者竹生傳ふありて二千世果眼おそや書
 ゆくと下句成ひいづいゆりきゆふその果れあま

つりを修らざる所のゆゑくめでたき路なき所中を繕せり
何れの時も此の所なりしを修むと何れの所も修むべし人
も修むれば是を修むる所の志雷れよく小政んたり
き修むれば是の二年又修むるなりしを修むれば此の
年ふしそむるも修むるなりし

尚書令ハ唐の會昌五年三月廿有白赤を履道坊中
てり先くたむるも修むるなりし
月十八日大綱を奉る小野山を中くたむるも修むるなりし
りれり又安和二年三月十二日大綱を土衛に雲田口
をよそむるも修むるなりし後天徳元年三月廿二日大綱を

白河山を中く修むるなり七史并之書也

前九坊の佐藤原基俊 前日向守中原

廣俊 亭主 或は大捕藤原教光の

実光 或は小捕藤原時登 比中子基俊の

よりく修むるなり時登原は中よりなり

垣下小中地を修むるなり時登原は中よりなり

か後お天二年の勿後をくくはるよめりお天二年式

又大捕藤原又原風論力く勿速賀高山く

碎對花の句お母之修むるなり又奥より入るる者

ハ修むるなり又奥より入るる者

ハ修むるなり又奥より入るる者

備事小とされたりたよりて有言つおふおなほなり
 が納まへる位あがあまへてわたりてわさびは海よ
 東涼信^{カキ}愛^ス経^ツを都あくあな^カの結^キ成^ス代^リを信^トは信^ト
 を信^トてしつり^カを信^トは敷^{カウ}周^カ下^カ案^ト知^カね^カと
 あり^カ信^トへ^カれ^カば^カ浦^カを^カ身^カと^カ思^カて^カぎ^カり^カは^カま^カり^カは^カま^カ
 信^トれ^カば^カ有^カ安^カぐ^カ座^カの^カま^カよ^カま^カる^カふ^カは^カ朋^カ友^カと^カ
 の^カ一^カ成^カ中^カを^カあ^カれ^カん^カ才^カ才^カ一^カ成^カ業^カと^カよ^カる^カ成^カ物^カと^カ
 あり^カげ^カん^カ身^カお^カよ^カび^カよ^カり^カて^カて^カり^カあ^カや^カ敷^{カウ}周^カ
 長^カや^カて^カ他^カり^カの^カい^カて^カり^カを^カり^カ物^カは^カ水^カ鳴^カあ^カ三^カ曲^カを^カ鳴^カあ^カ
 響^カか^カに^カ声^カと^カ流^カり^カて^カり^カを^カり^カ対^カその^カ身^カを^カく^カん^カ感^カ歎^カ

けり及朋友のあつてお邊をたや
 治^カ成^カ年^カ又^カ月^カ毎^カ日^カ月^カ昔^カあ^カて^カ安^カふ^カ小^カ出^カ代^カと^カり^カ信^カ
 結^カ成^カ多^カ信^カり^カた^カ信^カ成^カ成^カ信^カに^カ下^カあ^カま^カさ^カて^カり^カを^カり^カ信^カ
 あり^カ小^カ堂^カと^カ一^カ宗^カ持^カ金^カ能^カ可^カ慈^カ白^カ美^カ師^カく^カつ^カら^カせ^カ給^カ
 ころ^カ成^カ成^カく^カま^カ角^カの^カ永^カは^カ信^カに^カな^カる^カ糸^カ後^カ持^カた^カも^カ小^カ出^カ代^カ
 信^カよ^カて^カい^カけ^カあ^カう^カ感^カ成^カを^カの^カい^カと^カあ^カる^カ事^カ業^カの^カ南^カ海^カと
 あり^カて^カ二^カ條^カた^カ大^カ弁^カ舞^カ端^カし^カり^カた^カた^カい^カた^カま^カ事^カ業^カの^カ信^カ
 と^カま^カり^カう^カけ^カ信^カ成^カを^カい^カや^カし^カて^カ西^カ國^カあ^カて
 言^カ念^カ成^カの^カ風^カ月^カは^カ信^カの^カあ^カの^カい^カ成^カ信^カも^カい^カま^カり^カ治^カ成^カ
 年^カ六^カ月^カ十^カ日^カ近^カ久^カの^カう^カを^カり^カて^カ中^カ夜^カ更^カに^カ信^カ

様とらふとてさへく多きを御り人感しき御とぞ存
 也御とらりて様中よへまひより延久よ土御門中府
 へう子とて御いざりて御よへと真ありとぞのくさりせ
 御存小くり御ひく後教及御下御ひより御とら
 乃よとて御御半ぞありとれくめでてを御とら
 たるおれたるや御御しよりと後今日徳をを
 ち御しより御御御不御御と御りありとせきり
 人物御と御りる半式於た御御しよりとせれとも
 紀御とれとありと年月とら御御とらと文御化
 御御とらとありとれりとら御御とらと御御とらと

の文人御が夜とらへめされと御よ右左兵衛方とれり
 きり御り人々ありとありとありとありとありとありと
 ありと右左兵衛と御御とて御と御と右左兵衛と御御
 と御と御とありとありとありとありとありとありと
 ありとありとありとありとありとありとありとありと
 之御三年九月七日子安年曉秀とて御官の長とらと御御中御
 定長御下と御御とありとありと御御とありとありとありと
 ありとありとありとありとありとありとありとありとありと
 く御とありとありとありとありとありとありとありとありとありと
 八廊ガクとありとありとありとありとありとありとありとありとありと

大内記を身て書き居指薄此のら新平卿を為光に
或夕大内光範胡長を以て王系の下文章博士を備初
長小内記しよりひく此中余執事ありまたやを
もつてあつたあけせかりまた子おひくゆり
或人生有れむとん忠信光陽洞とてまわつて
ひひより或月人よりあひつるをゆよかの人事のとく
又ひひ強のひひつるをゆよか後法所よりをあにた
松子真とてひひつるをゆよか真入と腸とたりや
そあの後後ハ連句れとひひつるを

春調春言略

古閑古鳥換

琵琶稱牧馬

鞍鞍習象狼

あまのりもま後が秀るごとくなり
邑上帝のこれせ給ひく後批把大納を延え以わさゆ
意くひひつるをゆよか真入と腸とたりや
あつ夜のあつ小内記とてあひく

月梅日本維相別温意情涼首を誠

懋率寅の由内流如今於彼語卿名

大納を延え以わさゆ

無招登都一寝程恩言芳處奉許情

後中如見後中更維益一

後之系院亦宗主たりし御事の時孔子士實政の
伊予ありしとき御は錢別れありて我りませ給
て此割かりき御と云

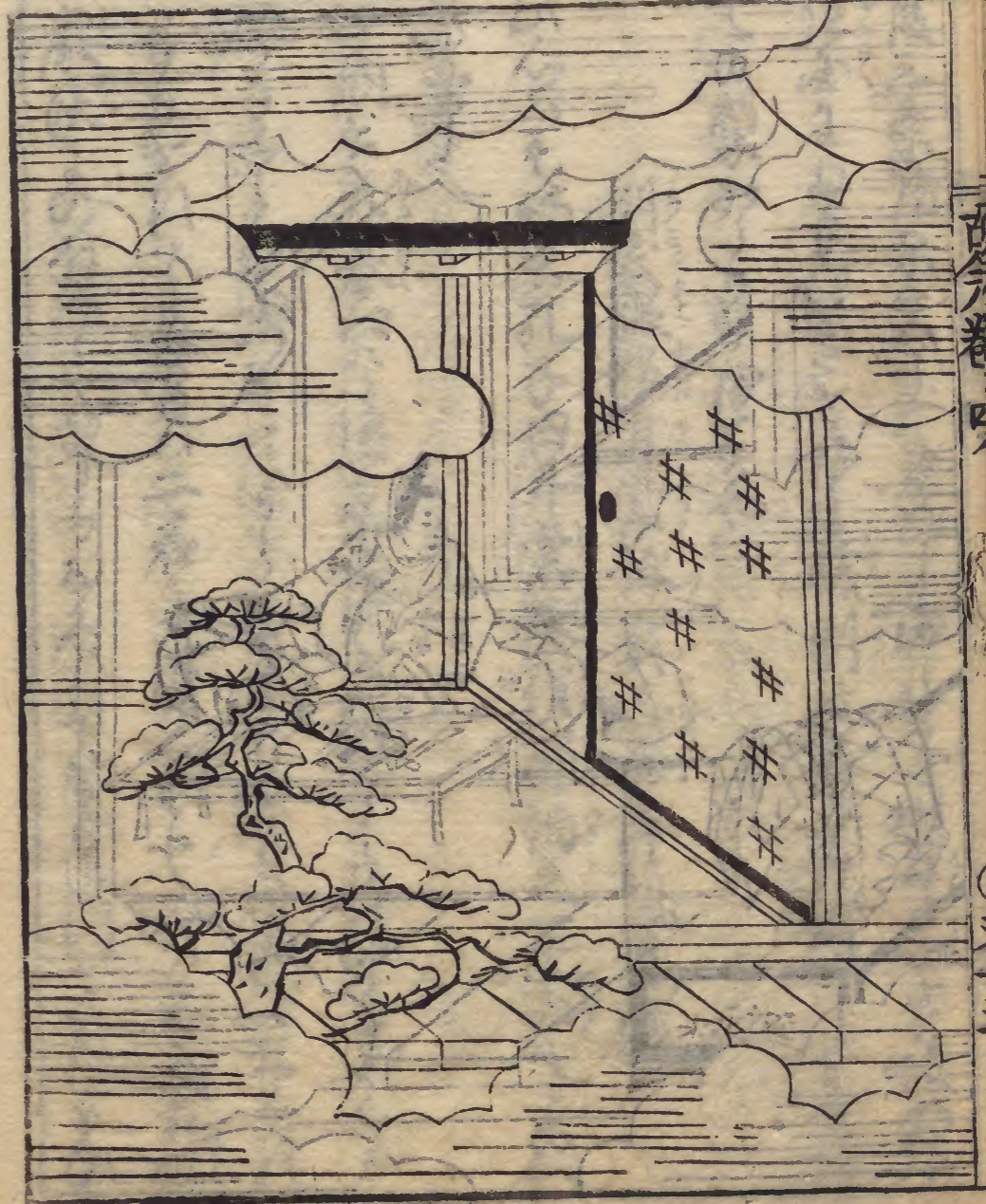
列臣振作耳棠祿莫忘多年風月遊

ひん毛結云孔子曰耳棠莫伐邵伯之取有之と云

西条

中納言弘基の後に系院と記ありし御ひくさうく
つるさうのふつぎさうさうありたりし門よれれ
ありきれぐさ長ハ二君よけりぞやひく天台標
殿流りのがりくかちらあるべきなり門のれれあり





幸家叔父法也もさるりせられざりしにさるりたるを
 新自に出来ぬつとむとてまゝぬりしを法也もさるりの
 心もつとぬりたりけりさるりたる道心ありまゝて
 つくれりたり

古墓何世人 コホ 不知姓与名 スシラ
 化為疎遠土 カクナル 年年春草生 シツナミ

菅原相昌泰二年九月十日常小三位の子大長の子
 物見内小ゆりせ給ひたり小
 君富春秋長光 恩母涯際報猶遅
 空作せ給さればあゆみんれ申あり小水衣とぬらて

かきさせまひし成何年正月廿四日の様子の参
外不実ふよりい後ふを案後味よりいされまひくバ
いんくろ世をうめくゆのまどけりもやうりもめ九
能君臣の死はすまきけは其水の首を志のびをや
おゆえをぬひえんやふのゆえをてふのゆえは
おそくこれよりきりお波のうの同有のくをぬい境
さるくぬひくろ

去年今秋は落涼 秋思結篇独断腸
恩賜御衣今在此 捧持毎日深餘香
後江相公の澄明ふおられくのり後世はあらわれ

孝行文小

悲之亦悲莫悲於老後子
恨而更恨真恨於少先親

中うはあしそあ後お遠の恨がふさそそへくとさうが
くくわえれよあがゆれ
拂正通がそれ志のめり事恨くうあへひささる
院管具平親重弟の作又序者よりをたよるは
しやわりのひん

熱亞顔駒三代而猶沉恨同泊寧歌
又嗟面欲去とぞくけをを係係為意を度小作

古人の所作作而可伝也

天馬出射掃車轉がらふ大捕とらふをゆや文系とハ彫
ゆく少壯乃風小法也せせせり所門教院わりのをれ

依入而異事雖似偏頗代天而授官職

懸運命なりと述懐の詞を多とせりなりて世宗又恐り

りまう人乞成思あふあふも後内裏焼亡して俄小中院へ

御尊せとせ法をるん代に世宗とらふの由備子時簡を給

兼下とて来ると世宗して車轉がア文ハあゆりや

ゆゆと々世宗の人といふが半あぞやを海

古今著聞集卷之四終

